



王宮浪漫に  
巻き込まないで！

渡里あずま



# 王宮浪漫に巻き込まないで！

渡里あずま(表紙 zhenliu)



## プロローグ

日本じゃないから、臣籍降下はない（長男以外は基本、家を継がないので必要ない）けれど。

庶子で宮廷の華、いや、美姫という華に舞い降りる蝶とくれば光源氏を連想しませんか？ え、私だけですか  
そんな乙女の妄想が具現化したような、むしろ完璧過ぎて恐縮しちゃうような『彼』がですよ？

「驚いた……天は、二物も三物も与えるのだな」

宵闇を思わせる、濃紺の髪。

琥珀色の瞳は、今は獲物を見つけた獣を思わせる金色に輝いている。

声すらイケメンな彼が、感心したようにそう言っ、近眼の私にも見えるくらいの至近距離で見つめてくるなんて。

……って言うか、私のは単に眼鏡を外したギャップだけです！ その言葉、そっくりそのまま貴方にお返ししますから！

## よし、自立しよう

私の名前は、ミナ。十七歳です。

名前から、異世界トリップを連想されたかと思いますが、ごめんなさい。私は前世が日本人で、中世ヨーロッパ風な異世界に転生しました。まあ、どちらも最近の小説（勉強や仕事の合間に読んでました）ではよくある話ですね。

とは言え、そんな小説とは違って私にはいわゆるチート能力はなく。

前世を思い出したのは、六歳の夏。母親が流行り病で、亡くなった時で——そのショックで熱を出し、数日寝込んだ私は、父親の腕の中で思ったんです。

（よし、自立しよう）

地（前世）の口調でそう思ったのは、そんな私の前世に関係があります。

実は私は前世では施設育ちの孤児で。一人で生きていく為に大学卒業後、翻訳会社に登録して少しずつ翻訳家への道を進んでいきましたが——その矢先に事故に遭い、そのまま亡くなった訳です。

前世の記憶に目覚めましたが、私にはこれまでの記憶もありました。母親の記憶もあり、父親もいてくれる現在<sup>いま</sup>はむしろ恵まれていると思います。

……思いますけど、私の父親は郊外の小さな村で、小さな子に読み書きを教えていて。何でも若い頃にリアリス皇国で学んでいましたが、人間関係でドロップアウトをし、故郷に戻ったと周りの大人達が噂していたのを聞きました。その時は前世を思い出す前でしたから、よく意味が解ってなかったんですけどね。

あと、この世界では結婚の際に持参金制度（花嫁側の家から花婿側に金銭や家畜を渡す）があるんですが、貧

しい家だと幸せな結婚が難しいんです。こき使われるだけならまだしも、金持ちに文字通り『買われたり』するんです。

そんな訳で、私は決意しました。

前世同様、勉強してバリバリ働こう。

この頼りないけど優しい父親に、迷惑をかけないように——いや、むしろ仕送り出来るように頑張ろう、と。

## とは、思ってみたものの

……さて、決意したまでは良いけれど。

そこで私は、壁にぶち当たりました。

まずは前世と同じ翻訳家を考えましたが、そもそも本を読むのは富裕層が聖職者くらいです。そして、大抵の本はそんな上流階級が学ぶ古典リアトリス語で書かれているので、翻訳家の出番はありません。

次に通訳はどうか、と考えましたが生まれ育った国を出るのも富裕層が多く、そういう方々は、既に馴染みのある面々に頼むので新規参入は難しそうです。

そんな中、私は女家庭教師という仕事について知りました。

今までは令嬢の花嫁修業として、寄宿舎学校に預けることが多かったのですが——最近では、自宅で学ばせるのに家庭教師を雇うようになり。何せ花嫁修行ですから、同性である女性が求められるようになりました。

これだ、と思いました……ただ、ですね。

(庶民じゃ、そもそも勉強が出来ない)

そう、さつきから私が『富裕層』と連呼していたアレです。結婚もですが奨学金制度もない為、私ではスターラインにすら立てないことに気づきました。

(勉強するのに、お金がかかったら本末転倒だし。諦めて、他の道を考えるか)

小説みたいに私が上流階級に生まれていれば、あるいは世の中自体を変えられたかもしれませんが、無い物ね

だりをしてもしも仕方ありません。

こうして、六歳にして初めての挫折を味わったのですが——そんな私に、思わぬ救いの手が差し延べられました。



## 何者

こうして、私は屋根の下で温かいご飯が食べられています。そして、一人じゃありません。目の前には『お父さん』がいます。

(これ以上、欲張ってどうするの)

そう心の中で呟きながら、私が野菜スープを飲んでみると。

「どうしたんだい、ミナ」

「えっ……?」

「元気がない。母さんのことだけじゃなさそうだ……何か、あつたのかい?」

気づかれていたことに驚きましたが、本当に何もありません。ただ私が勝手に盛り上がって、上手くいかないからと落ち込んでいます。

とは言え、そう答えたら六歳児らしくないと思ったので、私は首を横に振って応えました。

「……おいで、ミナ」

そんな私を、父親が手招きします。

戸惑いつつも近づくと、父は私を膝に乗せて顔を覗き込んできました。

(はあ……相変わらず……)

感嘆のため息と呟きは、何とか心の中だけで留めました。

首の後ろで束ねたプラチナブロード。優しく見つめてくる瞳は、夕闇を思わせる紫です。

(『お父さん』って、こんなに綺麗なもの?)

その疑問を、私はすぐに打ち消しました。前世で同級生の女の子達から聞いた、不満の数々を振り返るとやはり『お父さん』の方が、希少価値なんだと思います。

「ミナ？」

いけません、つい物思いに耽ってしまいました。まあ、現実逃避もありましたけどね？

「……べんきようが、したくて」

「えっ？」

「かていきようしのせんせいに、なりたくて」

ごまかしきれないと思った私は、観念して子供になりきって打ち明けました。そう、まあ、今の私はなりきる以前に『見た目は子供』なんですけどね？

当然、父親は聞き返してきましたし、補足した後も不思議そうに見つめてきました。

（変に思われた……嫌われた？）

せっかく出来た父親なのに、と泣きそうになっていると——そんな私の頭が、不意に優しく撫でられました。

「大丈夫、お父さんが教えてあげるよ」

「……えっ？」

「古典リアトリス語と、今ならディアスキア語も覚えていた方が良いね。あとはピアノと絵、どちらが良いかな？」  
父親からの提案に、私は驚いて顔を上げました。子供に対する方便かと思いましたが、それにしても具体的な提案です。

（お父さんって、何者？）

一瞬、引つかりましたがそれ以上に大切なことがあります。

（……勉強、出来るんだ）

「ありがとう、おとうさん！」

嬉しさのままに抱き着くと、お父さんは笑って抱き返してくれました。

## そして、十年

『お父さん』の噂は、半分だけ当たっていました。

曰く、ディアスキアの商家に生まれた父は長男ということで色々勉強をし、リアトリスへの留学の機会まで与えられましたけれど——如何せん、性格的に商いには向いておらず。遂には、父の弟が後を継ぐことになったそうです。

「むしろ、解放されたと思ったし……留学先から飛び出しても、特に探されはしなかったけど。まあ、その頃は母さんに拾って貰っていたから、お互い様だよ」

何でもないことのように話をされ、しかも笑顔だったので私にはそれ以上、何も言えませんでした。まあ、その話を聞いたのが七歳の時でしたから、そもそも答えは求められていなかったと思うことにします。

代わりと言っては何ですが、私は可能な限り父親の持つ知識や技術を取得しました。絵画こそ向いてはいませんが、それ以外の読み書きや礼儀作法、ダンスや算盤、そしてピアノは頑張りました。ピアノが家になるので、教会でオルガンを借りるのはご愛敬です。

……そして、私が十六歳になった時。

「これ以上、お父さんに教えられることはないよ……行っておいで、ミナ。そして今までの君みたいに、生徒さんに教えておいで？」

「ええ、ありがとう。お父さん」

お礼を言って頭を上げると、私は眼鏡をつい、と指で押し上げました。

勉強のし過ぎで目が悪くなり、一メートルも離れると目を眇めしてしまうようになった私は今、分厚いレンズの

眼鏡をかけています。

近所のお婆さんから頂いた濃紺のドレスは、ひだもリボンもレースもない、シンプルなもので。長い栗色の髪は編んで、後頭部できっちり束ねています。

（完璧な『ロットンマイヤーさん』だわ）

異世界では全く伝わりませんが、私的には仕上がりで大満足です。

そんな訳で、私は故郷の村を後にしてリアトリス皇国へと向かいました。

---

---

## 王宮浪漫に巻き込まないで!

発行日 2022年5月23日

著者 渡里あずま(表紙 zhenliu)  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486>

連絡先 [contact@rainbow.sakura.ne.jp](mailto:contact@rainbow.sakura.ne.jp)

印刷 シメケンプリント / Adobe Stock

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---